
十円禿に恋唄の祝福を

空空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十円禿に恋唄の祝福を

【Nコード】

N44290

【作者名】

空空

【あらすじ】

このあらすじは釣りです……

その日彼はいつもと違う道を通った。それが全ての始まりだった。襲い来る侵略者、謎の露天商、魔術の行使に必要な贄は彼自身の毛髪だった。彼は選ぶことになる。髪か、彼女か……

「……タタタ堂？」

学校帰り、通学路、放課後、商店街、んでもって、

「……タタタ堂？」

錆色の暖簾に、木目の粗い看板、その両方に「タタタ」の文字。堂と付いているからには店なのだろうが、「タタタ」からその内容を推し量ることはでき……ない。

周りには……せいぜい猫しかいないな。

ここは商店街の裏路地で、多分ここを使うのは僕を除いて数人だろう。僕だって家と学校のつかみ地として使っているだけ。

気づかなければよかったものの、気づいてしまった以上、無視できるほど好奇心は弱くない。

入ろうかどうか迷っていれば、店の奥から現れたのは、胡散臭いおっさんだった。

「や、」

髪型はオールバック、丸いサングラス、色黒の肌に真っ黒な甚平。そんな彼が手を挙げて、こちらに向かって笑顔を向けている。

「あー、えっと」

「ほらほら、そんなところに突っ立ってないで入った入った」

無遠慮にもこちらの手をつかんだおっさんは、僕を店の中に引きずり込んだ。

「いやー、きょう開店したばかりなんだけど、お客さんが少なくてさ。まいっちゃうよ。なるべく雰囲気のある外装に仕上げてみたんだけど、それが逆に入りにくいのかなあ」

こちらのことなどお構いなしに、饒舌なおっさんはまくしたてる。

客が少ないのは、なによりも立地、そして何を売っているかわからないからなんだろう。そのことを言ってみると、おっさんは目をサングラスを少しずり下げて笑った。

「なるほどね」

そしてそんな僕の疑問は店の中に入っても変わらない。

店の中にはいろいろなものがあつた。

鳩の形のお盆、抹茶色のスプーン、銀の耳かきに、わけのわからないものとしか言いようのないわけのわからないもの。

「まあ、扱ってるのはいろいろ、さ。お客さんの要望に合わせてなんでも出す。それがうちのスタイル。んでもって僕の矜持、アイデンティティ、そして……まあ、なんでもいいか」

へらへらと笑う。

胡散臭いおっさんだ。

「さて、ところで何かお探しのようだけど、いったい何をお探しだい？」

にやにやへらへらと、わけがわからない。

「僕を引きずり込んだのは、あなたでしょう。別に僕は欲しいものなん」

「いやいや、皆まで言わなくても大丈夫だ。君が欲しいもの、それはこれだね？ ……っと、あれ？ どこにおいたつけ。ちよっと待っててくれ」

おっさんはそう言うと、店の奥に引っ込んでいく。何やら水がこぼれる音、金属がこすれ、崩れる音、猫の鳴き声とおっさんの悲鳴。

ようやく現れたおっさんの手には、小さな木箱が一つ。ヒビの入ったサングラスを指で押し上げ、おっさんはおっさんくさく笑って箱を開けた。

中には普通の大きさの腕時計が一つ。バンドは革で少し古いけど、アンティークと言えば十分通じる。

「これはね、身につけると誰でも好きな人に変身できる、魔法の腕時計、ちよっと待ってちよっと待って」

帰ろうとした腕を掴まれる。ため息が漏れる。

「まあまあ、嘘だと思ってつけてみなよ。ちなみに使用制限は三回だから、よく考えて使うことをお勧めするよ。なに代金はいらない、今回は初回サービスというか君の前にも一人しかお客さんいなくてさ。これを機にどうぞよろしくっていうことで」

おっさんはこちらの手の中に無理やり腕時計を握らせる。

「まあまあまあまあまあ……」

「……」

§

「……」

ベッドのわきにはアンティークチックな腕時計。寝そべってそれを眺めている僕。

結局持って帰ってきてしまった。

さっきからちらっちら見ているのは、決してあのおっさんの言うことを信じているわけではない。

「誰にでも変身できる……か……」

もしそれが本当ならすごいことだ。

もう一度言おう、信じているわけではない。

だが、それでももし変身するとしたらだれにするだろうか。

思い浮かぶのは、武野先輩だろうか。武野先輩は僕と同じ剣道部の先輩。だが、彼に関してはどうでもいい。目的はその恋仲の宮野先輩。

例え先輩の体を借りただけとしても、もしも彼女とデートすることができれば、それだけで、きっと僕は幸せだと思う。

「はあ……」

きっと恋じゃなく憧れ。まあ欲求の一つ。

「……」

ベッドの隣に顔を向ける。

「別に、信じたわけじゃないけど」

言い訳しながら、腕時計に手を伸ばす。

腕に巻いて、はめて、とめて……

「なんだ、何も起こらないじゃん」

一分くらい待ってみても、体に異変は感じられない。

ため息一つで腕時計に目をやると、レンズに反射して僕の顔が……僕の顔？

「え？ うそ……」

いそいで姿見の前に立つと、そこにいたのはやっぱり武野先輩の姿だった。目をこすっても現実是不変わる。

「いや、でも、」

怖くなって腕時計を外すと、途端に鏡に僕の姿が映る。

「お兄ちゃん」

と、そこで下から名前を呼ばれた。晩御飯とか叫ぶ妹の声にいやに安心する。

「ああ、今行く」

まるで悪夢でも見ているような気分だった。

そして悪夢はどうやら重なるようで、

悪夢の扉が開かれた。

「お兄ちゃん、ごっはんっだよ！」

「今行くってば」

だが、振り返ったこちらの前で、妹は大きな目をくりくりさせて口をあけている。

「……お兄ちゃん、それ、どうしたの？」

妹の、頭を指し示すジェスチャー。

真似してみると……ん？

「え？　ちょ……？」

もう一度、姿見を振り返る。

そこではびっくりとした僕。いや、そんなことはいい。頭の、前髪の右側。

悪夢は牙を剥いて僕にかみつくのか。

妹の笑い声が部屋に響く。

僕の頭には小さな十円禿ができていた。

§

週一の安息日、聖なる日曜日は、穏やかな朝の怒鳴りこみで幕を開ける。

「どういふことですか！」

「いやあ、ははは……」

目の前で頬をかくおっさんのサングラスにはセロハンテープ。

「こんなことになるなんて、聞いてない！」

「まあ、言っていないしね、はは」

握りこぶしを固めて睨みつけてもおっさんの笑顔はびくともしない。俺は慣れない野球帽をむしり取って、十円禿を見せつける。

「大丈夫大丈夫……ささいな副作用だよ。まだ君なら若いから、一週間くらいで目立たなくなるはずさ」

「だからって……」

「それじゃあ、腕時計はもういらないかい？」

「……」

にやにやにやと笑うその笑顔は癪に障るが、腕から抜き取った腕時計をつつ返すことができない。

「……まあ、制限回数は後二回。好きなように使っていていいからさ。持っただけ持ったときなよ。なんなら帽子もあげようか」

奥からがさごそと異国な帽子を取り出すおっさんを背に、店の暖簾をくぐった。

「……あと二回、か……」

副作用の十円禿。だけど禿は一週間で消えるらしい。ならばこのチャンス、逃がさない方がいいかもしれない。

店からの帰り道、見慣れた顔を目にした。

「あ、とも……」

「とも」とは僕のあだ名、目の前には麦わら帽子をかぶったワンピース姿の女の子だ。

伊毛^{いも}。僕の近所に住んでいる、幼馴染のような幼馴染じゃないような。イモムシとよぶと、烈火のごとく怒り出す。昔はよくからかったが、大人な僕はもうそんなことはしない。

伊毛は空手二段だ。

「こんな朝早くに珍しいな」

「べ、別にちよつとね。それより少し急いでるんだ、ごめんね」

そそくさと、狭い裏道を横切る伊毛に道を譲る。

ん、そういえば昔はよく遊んだな。この路地で。

§

家に一度戻った僕は、姿見の前で時計をはめる。一瞬後には、そこには見慣れた武野先輩が。二度目ともなると、驚きも少ない。姿かたちは変わっても服装なんかは変わらないので、動くのにも不便はない。何より変身中は十円禿が消えていることに安心した。

制限回数のあるから、すぐに行動しなければ。

あこがれの姿を探して、僕は商店街へ。

と、探すのに苦戦するかと思ったら、思いのほか早く見つかった。

清楚な白いワンピースを着て、宮野先輩がきよろきよろとあたりを見回している。

「や、やあ優子」

なるべく武野先輩の口調を心がけて、話しかける。

「あ、まさくん」

まさくんとは、宮野先輩が武野先輩を呼ぶ時のあだ名だ。

人のあだ名とはいえ、宮野先輩にこんな風に話しかけられたことに、胸が躍ってしまう。

嗚呼、僕は今、宮野せん、いや、優子の恋人。

「「暇だったら、どこか行かない？」」

宮野先輩と声が重なり、僕は少し笑ってしまった。

デートは順調だった。近くの公園で話をし、ファミレスでランチをして、夕方には川沿いを散歩する。

途中何度かぼろを出しそうになったが、不思議と疑われるようなことはなかった。まあ、誰かが変身しているなんて考える方がおかしい。

最後には、少し罪悪感があったけど、キスをして、別れた。

そんなわけで、この週末は僕の人生において最高のものとなった。

鼻歌交じりにスキップして登校なんて、もしかしたら初めてかもしれない。あまりの嬉しさに、十円禿も気にならない。まあ、帽子はかぶったままだけだ。

十円禿万歳。

タタタ堂の前の裏路地を通ると、伊毛に出会った。

「おはよう。髪型変えたのか？」

「あ、おはよ。うん、ちょっとね」

にこにこ笑っている伊毛。ずいぶん機嫌がいいようで、その日は数年ぶりに伊毛と学校へ登校した。

だが、学校について数十秒で、悪夢は訪れる。

目の前に武野先輩と宮野先輩が手をつないで登校していた。宮野先輩の顔を見て、自然と頬が赤くなる。

昨日、先輩とデートして、そしてキスまでしたのだ。

と、そんな二人の空間に、一つ影が割って入った。

「よお、武野」

武野先輩の親友、同輩、そして悪友。剣道部の副部長を務める牧野先輩だ。

「おいおいお前ら、朝からあついなー。昨日も河原でデートしてたろ。うちの前の河原で見せつけやがって……」

心臓がドクンと跳ねあがる。昨日デートをしたのは僕だ。だからもちろん先輩は答える。

「なんのことだ？」

牧野先輩はさらに問い続ける。

「だからうちの前の河原で、しかも二人でおそろいの腕時計なんかつけちゃって……って、本当に違うのか？」

冷や汗の出てきた僕の前で、武野先輩は堂々と答える。

「俺たち昨日は隣町にショッピングに行ったぞ」

……え？

武野先輩の言葉に違和感。そして悪夢は止まらない。

隣町？ ショッピング？

「うん。それでそのあと、まさくんちで勉強会してたんだよ、ね」

そして宮野先輩が笑って言い放つ言葉キラリ僕の胸をえぐる。

頭が痛い。ふらりと倒れそうになり、かろうじて電信柱に身を任せる。

どういふことだ？　僕があいつであいつは俺で、どうしてこうしてああなった。

僕が宮野先輩とデートしている時、武野先輩は宮野先輩とデートしていて、宮野先輩も本当の武野先輩と……

じゃあ、僕がデートしていた相手は一体。

倒れそうになる僕の横で、だがもう一人倒れそうになっている人物がいた。

「お、おい伊毛。だいじょうぶか？」

ほとんど反射的に問いかけるが、伊毛の顔は真っ青だ。

その時だった。

春一番が吹き荒れる。

僕の帽子は宙を舞い、伊毛の髪がほどけ散り、そして恋の十円禿が陽光に照らしだされる。その数合計四つ。

二つは僕の前頭部、二つは彼女の頭頂部。

僕らはお互いを指さして立ちつくした。

学校のチャイムは遠く。

僕は近くの自販機で無糖の缶コーヒーを買い、学校に背を向けた。

「もう、どうしてこんなことになったの……」

肩を落とした伊毛が、ブランコを揺らして呟く。まったくもってその通りだと、無言の同意を向けておく。

きいきいときしむブランコは、子供のころにもこうして乗ったことがある。

あのころはよかったなあ。

などと時間遡行の願望を抱いていると、がしゃこんとブランコから伊毛が立ち上がった。

「あたし、これ返してくる」

手に持っているのは僕とおそろいの腕時計。

「こんな物に頼ったからこんなことになったのよ。こんなものに頼ったから、その……」

そこで頬を赤らめないでほしい。こっちも恥ずかしいじゃないか。

「とにかく、私はこれを返して！　それで武野先輩に告白する！」

空を睨み付けて、高らかに宣言する伊毛。

「ふられるならふられるで、もうすっかりけじめをつけたいの」

その姿は死にざまを決めたもののふそのものだった。

§

あくる朝、気が進まないがのそのそと布団を脱出して学校へ向かう。

もちろん帽子は外せない。もし今の状態で十円禿が皆にばれれば、僕は生きていけないのだ。

「やあ」

途中、タタタ堂のおっさんに会った。

「いやあ、昨日第一号のお客さんから君にあげたのと同じ時計を返品されちゃってさ。まいったまいった」

「……」

「やだなあ、そんなに睨まないでよ」

授業なんて耳に入りすらしない昼下がりの午後、僕はふらふらと校内を徘徊していた。あてはない、あてどない旅路。

このまま違う世界に行けたのなら、そう思いつつ体育館の裏に差し掛かった時だった。

「私……私、先輩のことが……」

聞きなれた声だった。聞きなれた影が二つだった。

勇気を出した告白だった。

惨敗だった。

それも見えていられないくらいの。

まさか武野先輩があんなことを言うなんて、僕も知らなかった。

敗残兵は、しばらくそこから動けなかった。僕もそこから動けなかった。

§

「やあやあ、やっと見つけたよ。いやあ学校の入り口で不審者と間違われちゃってさあ」

校庭でボーっとしていると、現れたのはおっさんだった。オールバック、サングラス、甚平。むしろ良く学校に入れたものだ。

「ねえ、腕時計、三回目ってつけた？ 付けてないよね？ 付けてないはずだ！ よかったよかった」

なにが良かったのか、と僕は唾でもはいて怒鳴りたい気分かられた。もとはといえば、こいつのせいで伊毛はあんな爆死を……

だが、それはただの責任のなすりつけでしかないのだ。

あの後、声をかけても、伊毛は死んだ魚のような反応を返すだけだった。武野許すまじ、と僕に心にかたく決めさせるほどひどいありさまだ。

伊毛は僕の幼馴染のようなものだ。幼馴染ではないけれど、僕は伊毛のことをよく知っている。よく知っているくらいには伊毛のことを友達だと思っている。

「いやあたいたしたことじゃないんだけど、君にあげたあの腕時計ね。あの後探してたら取り説が出てきてさ。一応いつそこおうかなって」

にやにや笑うんじゃない。

「あの時計ね。三回付けるとき、三回目に出来た十円禿は消えないんだよね」

ああ……え？ うん。

「間に合ってよかったよー。良かったら回収しようか」

一生消えない十円禿。高校生にはあまりにも重すぎる荷。

……僕は時計を取り出して、はたと一つ思い至る。

冗談じゃないと思い、だけでもしかしたらと悪魔か天使かわからない僕がほくそ笑む。

「おいおい本気か？」

「本気だとも」

そう、本気だ。

僕は腕時計をはめる。

おっさんはにやにやと笑っている。

キューティクルよさようなら。

僕の姿はなくなって、後にはにつくき武野めの外見が。

走り去る前に、僕は立ち止まって振り返る。

「どうしてタタタ堂なんだよ」

おっさんは、自分を指さして笑う。

「おっさんの名前、多々田っていうんだ」

それはきつと嘘だと思ったけど、面倒なのでもう何も言わなかった。

夕暮れのブランコに、女の子が一人。

僕が前に立つと、女の子は顔を上げた。その表情が驚愕とか羞恥とか憤怒とか、まあそんな感じの色に染まる。

その頭にはちらちらと砂漠地帯が見え隠れする。

ちくしょう。

女の子が十円禿をつくる覚悟で、それでも一度だけデートしたくて、それにも失敗して覚悟決めて、告白したのをあんな風にふりやがって。

だから僕は口を開く。彼女のために、男の魂すら削り捨て。

伊毛の心を晴らすために。

「やーい、イモムシー」

カラスの声がやけに鮮明だった。

凍った時間を切り裂いたのは、伊毛の平手と僕の頬が紡ぎ出すメロデー。

烈火のごとく怒った伊毛は、夕暮れの拳を真赤に染めた。

嗚呼神よ。戦士の魂に救済を。

顔を晴らした僕に馬乗りになったまま、伊毛は瞳を涙で濡らした。

伊毛は昔から、体を動かすとすつきりする。

はれ上がった頬で押さえようと上げた手で、伊毛の頭をなでてやる。

そこには小さな腕時計。

伊毛の手がゆっくりそれを外した。

「ありがとう、ごめんね……」

泣き笑いというのはずいぶんあでやかである。例えそれが、自分をぼこぼこにした相手であっても。

十円禿すらかわいく見える。

伊毛の指先が僕の禿をなぞり、それが嫌にくすぐったかった。

それが僕の、十円禿生活の始まりだった。

ここから始まる恋がある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4429o/>

十円禿に恋唄の祝福を

2010年10月22日05時40分発行